本埜村角田台遺跡出土の文字資料

猪股　昭喜・谷　　旬

1．はじめに

角田台遺跡は、印旛郡本埜村角田に所在し、住宅・都市整備公団千葉北部地区の市街地開発に先立って、昭和52年８月から平成７年12月までの18年間、断続しながらも発掘調査が行われた。

遺跡の面積は167,700㎡あり、先土器時代から歴史時代までの遺構・遺物が多数検出された。発掘の完了に伴い、平成７年度調査区域の舌状を呈した台地の南側部分から見つかった、８世紀から９世紀にかけての住居跡から出土した墨書土器等について紹介することにした。

第１図　遺跡の位置

2．遺跡の立地と概要

角田台遺跡は、印旛沼に注ぐ師戸川と長門川に開折された小支谷が形成する標高約26m～29mの台地上に広がった、東西640m、南北400m程の遺跡である。

主な遺構として、先土器時代ブロック100か所、縄文時代住居跡２軒、弥生～古墳時代前期住居跡15軒、奈良～平安時代住居跡40軒、掘立柱建物跡５棟、土抗・陥穴等240基、中近世溝14条等があげられる。

先土器時代については、10,000点余りもの石器及び剝片が出土しており、特に平成７年度調査区域の北端では、約500㎡の範囲でⅢ層から2,400点余りが集中して出土した。

掘立柱建物跡を含む奈良・平安時代住居跡は、台地東側から南側にかけての斜面に多く分布しており、切り合いをもつものもあった。中央の南に張り出す舌状部には弥生時代住居跡が、また西側の

第２図　角田台遺跡南西部（平成７年度調査）（Ｓ＝1/2,500）

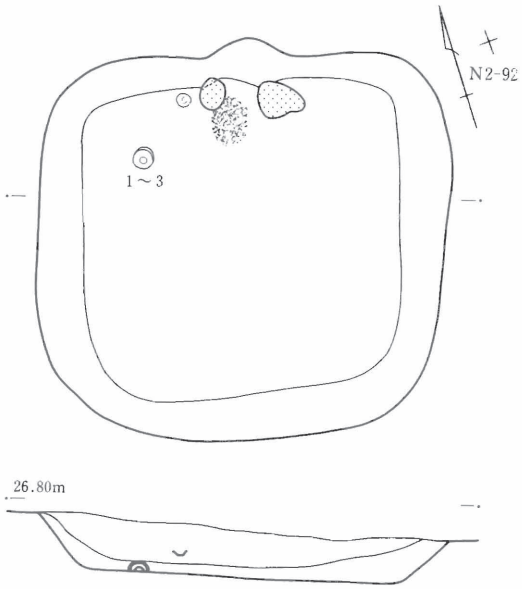
舌状部には弥生時代から古墳時代前期の住居跡と奈良・平安時代の住居跡が検出されている。

墨書土器も数か所で出土しているが、平成７年度調査区域（西側舌状部）には「千仏」「寺」等の文字が施された土器が出土したほか、香炉の蓋の破片が出土しており、当地が仏教と何らかの関係をもっていたことが想像される。

３．388号住居跡

平成７年度調査区南端近くの緩斜面に存在する。平面形は方形でＮ－23°－Ｅに主軸をとる。規模は4.30m×4.28m，面積は18.1m²である。確認面から床面までの深さは平均32cmである。床面には、柱穴、出入口ピット及び周溝は確認できなかった。北東壁にはカマドが確認されたが破壊されており、床面に焼土及び粘土、山砂がわずかに広がっているだけであった。

遺物は土師器・須恵器の破片が全体的に散らばっている状態であったが、北東壁及び北西壁よりそれぞれ１m程の所（カマドの左手前）に鉢形の土師器が重なって２点、更にその下に坏が１点、伏せた状態で出土した。また、北東壁のカマドの西側にあたる壁面が一部棚状になっており、その上に坏が１点、底が欠けた状態で出土した。



第３図　388号住居跡（Ｓ＝1/80）

４　出土土器

まず、388号住居跡から出土した３個の土器を紹介する。図の１は最大口径19.5cm、底径7.1cm、器高6,6cmを計る鉢形の土師器である。

全体にやや偏平な感じの半球形をしているが、この土器の特徴は口唇部にある。口唇の頂点は三角状に尖り、外面は６mmの幅でほぼ直立し、その中間は沈線様の窪みが一周する。内面は帯状にに膨らみその下端は深い沈線となる。すなわち口唇の上端を上方に引っ張り出してから、内側に押し付けるように折り曲げている様子が分かる。また体上部付近は轆轤目のためか、やや歪みが認められる。

全体はかなりの速度で回転する轆轤調整で、粘土巻き上げ痕などは残っていない。体部下端は２段の回転ヘラ削り、底部は回転ヘラ削りで平滑に微調整しており、切り離し技法は不明である。

焼成は極めて良好で、内外面ともに明黄褐色を呈し、焼き斑などは認められない。胎土は精製され、雲母・石英などの微粒子と赤色スコリアが若干含まれる。器肉はやや灰色気味で、極めて薄く、口唇下で３mm、底部でも７mmである。

体部の中央には「千仏」という文字が倒立して墨書されている。文字は比較的手慣れた書き方ではあるが、旧字の多いこの時期のものとしては「仏」は珍しい。またこれより115度離れた位置にも、一文字認められるが、墨が薄く、かつ傷があるため判読が難しい。筆の流れから倒立していると思われ、筆法などは前者と近似する。いずれも20mm～25mm画に大書され、墨は薄く粘りがない。

２も土師器の鉢である。口径19.8cm、器高7.3cm、

底径が8.1㎜で、全体に1よりやや大きく、1に比べより半球形に近い。口唇部の作り方も1と同様であるが、外面では内湾気味となり、内側の帯状部分の押し付けも顕著で、最終段階の微調整が行き届かず、その下端に「みみず腫れ」を残している。

全体の轆轤調整や体部下端から底部の回転ヘラ削りは1に準ずるが、底の中央部分がわずかに窪み、底の端部で抜き取る手法の回転糸切りの痕跡が認められる。

焼色・色調・胎土や器肉などは、全く1と同じであるが、器肉の厚さは4㎜～5㎜とさらに薄い。

体部中央には「鉢」の墨書が正位で、鮮明に書かれている。造りは旧字の「夲」である。27㎜画の横長文字で、筆致は細く、墨に粘りが残されている。また半周した裏側に横位に一字認められるが、この部分のみ白く変色しており判読しにくい。おそらく「イ」偏の付く文字であろう。30㎜画の縦長の細字である。

この二つの伏せ鉢の下から出土したのが、3の土師器坏である。口径14.8cm、底径7.5cm、器高4.9cmとやや大型で、体部下端で丸みを帯びるが、ほぼ55度の角度で直線的に開く器形である。

体部の下端及び中央付近に粘土巻き上げ痕跡を残すが、全体の轆轤調整は精緻であり、体部下端から底部にかけては回転ヘラ削りする。内面はヘラで磨き上げて、黒色処理を施す。

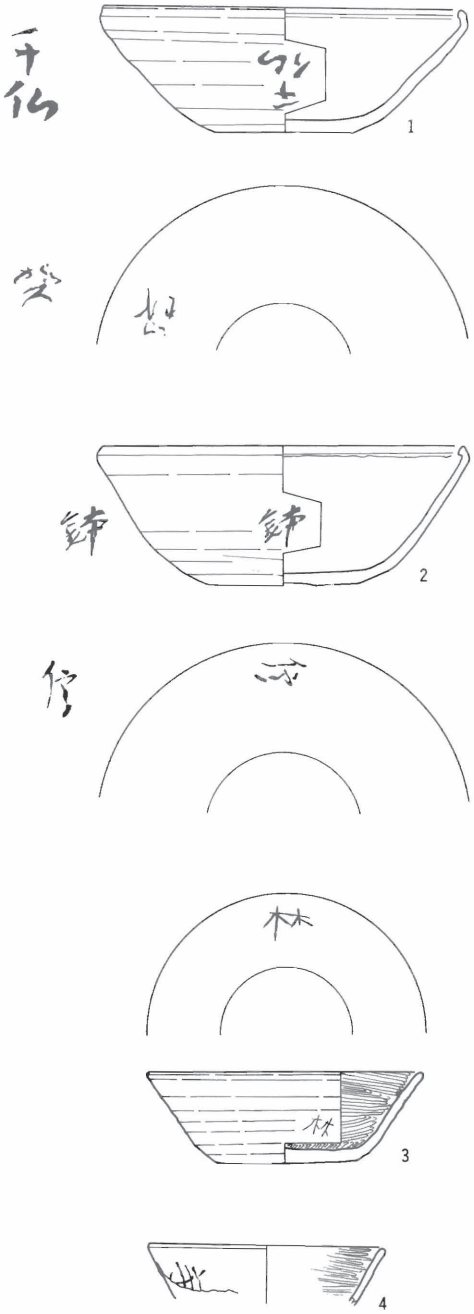
外面の色調は橙褐色、器肉は明黄色を呈し、焼成は良好、胎土には雲母微粒・石英粒・長石・赤色スコリアや白色針状物を少量含む。

体部外面及び反対側内面に「林」という線刻文字が正位で書かれている。前者は非常に細い線で表されており、やや幅広の後者とは明らかな違いが認められる。使用した道具が異なることは明らかだが、字形の違いなど不明な点が残る。

図の4は391号住居跡から出土した土師坏の口縁部である。約2分の1遺存し、口径12.6cmを測る。器形は、口縁に向ってほぼ60度で直線的に開く。

轆轤調整で、内面はヘラで磨いた後に黒色処理されている。外面は明黄褐色を呈し、焼成は良好、胎土に雲母微粒・長石粒が比較的多く含まれる。

体部外面に横位に「寺」の墨書が認められる。文字の中心部分には強い轆轤目が走っていて、文字の上部では筆が引っかかったためか、縦・横線とも蛇行している。筆致は極めて細く、墨の残りは良好である。



第4図　出土文字資料（S=1/4）

5　おわりに

今回紹介できた土器について簡単にまとめておこうと思う。

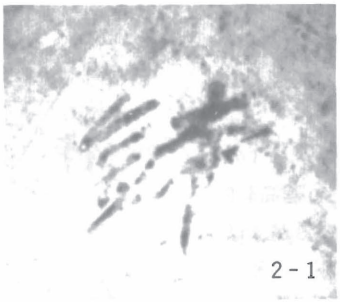
鉢形土器の類例は近年富みに多くなってきた感があるが、口唇部を折り返すものは県内にはほとんど見られない。口縁部が内湾する例としては八千代市白幡前遺跡の「佛」・印西町鳴神山遺跡の「佛」や八日市場市柳台遺跡の「千俣仏」など、いずれも仏器模倣と思われる磁鉢の形態を成している。

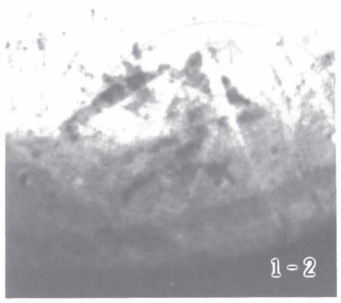
388号住居跡出土の鉢にも「千仏」銘があることなど、上に挙げた遺跡の例と極めて類似することがわかってきた。

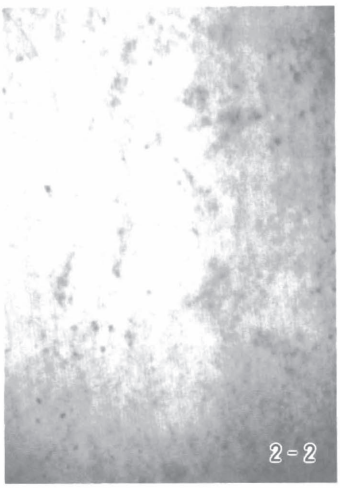
角田台遺跡からは奈良・平安時代の遺構として、住居跡のほかにも、掘立柱建物跡が5棟検出されている。残念ながらかなり離れた位置にあり、直接の関連は詳細な検討を経なければならないが、小規模な寺院関連の建物の可能性も併せ考えたい。

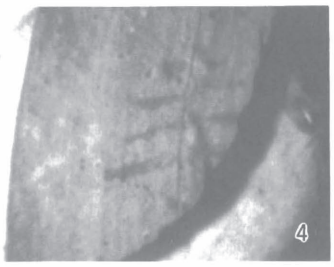
さて、出土した土器の年代はというと遺跡全体はおろか、388号住居跡のものも充分精査していない現段階では問題もあるが、3の黒色処理された大形の坏や、他の遺跡出土の類似する鉢から判断して9世紀の第1四半期としておきたい。

最期に、この小文を書くのにあたり、赤外線写真撮影や土器3の実測などは田形孝一君、出土状況写真などは佐藤　隆君の協力を得た。

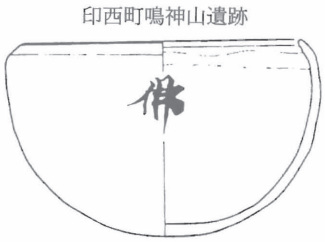


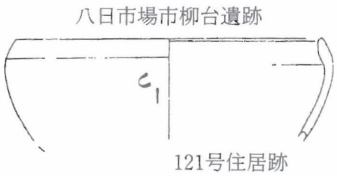






墨書土器赤外線写真
388号住居跡（1・2）
391号住居跡（4）





第5図　鉢形土器の類例（S=1/4）